

三条大橋の魅力

大倉悠太郎

(2018年度入学 鈴木ゼミ2期生)

「三条大橋」と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。以前の私は「三条通りに位置する橋」程度の認識しかもっておらず、その歴史はおろか、大まかな外観さえ思い描けなかった。しかし、対象への理解が深まった今、三条大橋は「以前とは全く異なる存在」として私の目に映る。

私は京都産業大学・現代社会学部の鈴木ゼミに所属している。ゼミでは、三条大橋チームの一員として「ポスター制作」・「商品開発」・「SNSの活用」に取り組んでいる。これらの三条大橋に関する活動を展開していく中で、私の三条大橋に対する認識は大きく変容した。今回は、私が考える「三条大橋の魅力」を紹介したい。「ただ、そこに存在している橋梁」から「誰かに語りたくなるような橋梁」へ。この文章を通して、三条大橋に興味を持っていただければ幸いだ。

本題に入る前に、三条大橋の概要とその歴史について簡単に触れたい。三条大橋は京都市の三条通りに位置しており、一級河川の鴨川に架かっている。橋長は74.03m、幅員は15.5m。近辺は通行量・交通量共に多く、活気に溢れている。松村博氏の著書『京の橋ものがたり』から三条大橋は室町時代、少なくとも応永30年(1423)には存在していたことが分かる。さらに、大永5年(1525)の京都を描いたとされる『洛中洛外図屏風 歴博甲本』(国立歴史民俗博物館所蔵)の描写から、三条大橋は元々、質素な木組みの橋梁であったことが確認できる。安土・桃山時代に入ると、木造橋であった三条大橋は石柱橋となる。江戸時代には、徳川幕府によって東海道五十三次の終点として位置づけられ、幕府直轄の公儀橋として維持管理が行われた。しかし、幾度となく洪水被害を受け、その一部が流出している。当時の三条大橋の工事や入札の記録によれば、17世紀半ばから幕末にかけて35回の改修工事が行われている。明治時代以降も三条大橋は架け替えられており、昭和25年(1950)に鋼単純H型橋として改装され、現在に至る。(※1)



三条大橋の外観
(パノラマ)

ここまで、三条

大橋の概要とその歴史を振り返ってきた。ここからは、三条大橋の外観を形成する「擬宝珠(ぎぼし)」・「木製高欄」・「石柱」の3つの要素に焦点に当て、その魅

力を紹介していきたい。

まずは「擬宝珠」について。擬宝珠とは、橋・神社・寺院といった伝統的な建築物の親柱の頭部に設けられる装飾である。現在の三条大橋には、大小合わせて12基（天正期製11基・昭和期製1基）の擬宝珠が設置されており、それぞれの擬宝珠には銘が刻まれている。銘が刻まれた擬宝珠という括りにおいて、三条大橋の擬宝珠は「日本最古」であり、五条大橋や松原橋などに設置されている擬宝珠とは一線を画す。

また、三条大橋の擬宝珠には「刀傷」の跡が残っている。これは、新撰組による尊王攘夷派弾圧事件である「池田屋事件（1864年）」の乱闘の際に付いたとされている。この話の真偽は定かでないが、若一光司氏の著書『大阪・関西の「謎と不思議」を歩く』にある「刀傷の考察（※2）」の話を読むと、ある一定の真実味を感じる。この刀傷の跡は、三条大橋の北側・南側共に西から2つ目の擬宝珠（最西端の擬宝珠を除く）で確認できる。普段何気なく通っている三条大橋には、日本最古の擬宝珠が設置されており、その擬宝珠には幕末の動乱の記憶が刻まれているのだ。ロマンを感じないだろうか。近くを通りかかった際には、是非足を止めてじっくりと眺めてみてほしい。



擬宝珠（青銅製） 刀傷と銘

次に「木製高欄」について述べる。京都市の管理する約2,900の橋梁の中で、木製高欄（橋梁の両側に設置されている欄干）を有する橋梁は、三条大橋・渡月橋・巽橋などの10橋程度である。また、三条大橋の高欄には現在では入手困難な台湾産の檜が使用されている。台湾産の檜は品質が良く、サイズが安定していることから建築材料として非常に重宝され、日本の神社や宮殿の補修等に多く利用されてきた。しかし、台湾では環境保護の観点から1989年に一級天然材の伐採が禁止され、1992年からは各級



を含む天然材が全面伐採禁止となっている。このような歴史的背景や大規模な親柱・地覆（高欄を構成する横方向の部材）を有していることを含めて、三条大橋の木製高欄は大変希少なものと言える。しかし、近年では木製高欄の老朽化に伴う美しい景観の喪失が問題となっている。京都市は三条大橋の補修・修景事業に際し、2018年4月からふるさと納税による寄付を募っているが、未だに（※3）目標額の一億円には達していない。鴨川に架かる橋梁の中では、唯一木製の高欄が現存している三条

大橋。高欄に利用されている伝統的な「木組み工法」も併せて、三条大橋の木の文化を次世代へ継承していきたい。

最後に「石柱」について述べる。三条大橋が石柱橋となったのは安土・桃山時代のことだ。天正18年(1590)、豊臣秀吉は増田長盛に対して三条大橋の架橋を命じ「日本初の石柱橋」が誕生した。三条大橋の天正期製の擬宝珠には「洛陽三條之橋至後/代化度往還人盤石/之礎入地五尋切石/之柱六十三本蓋於/日域石柱橋濫觴乎」【書き下し文：洛陽三条の橋は後代に至るまで往還の人を化度す。盤石の礎は地に入ること五尋、切石の柱は六十三本。蓋し日域において石柱橋の濫觴なるか（※4）】と刻まれており、架橋当時の三条大橋には切石の橋脚が63本あったことが窺える。



石

柱 一本の石柱の長さは約3m、直径は約70cm

対して、現在の三条大橋は40本の橋脚（東西方向に8列・南北方向に5本）を有している。その多くはコンクリート製だが、鴨川の最下流側に位置する7本の橋脚（東から2本目の橋脚を除く）には、今なお石柱が使われている。この石柱に関して、昭和3年（1928）に京都市が編纂した『京都名勝誌』には「形式舊に依るといへども、幅員甚しく擴大せるを以て、かの天正の石柱を徹し新橋柱を用ひたり」とあり、大正元年（1912）の改修時に天正期製の石柱が取り換えられたことが分かる。現在の三条大橋には架橋当時の石柱は利用されていない。しかし、「石柱を利用するという文化」は現代まで受け継がれている。私はここに「何としても伝統を守りたい」という当時の人々の強い意志を感じ、胸が熱くなる。因みに、旧三条大橋を支えていた天正期製の石柱は、今でも京都の各所で見られる。三条大橋・西詰北側の「スターバックスコーヒー京都三条大橋店」付近にある石柱のモニュメントは、その一つだ。他にも、京都国立博物館の「西の庭」や平安神宮・中神苑の蒼龍池にある「臥龍橋」などでその姿を確認できる。

臥龍橋（天正期の五条大橋の石柱も含む）

スターバックス 石柱モニュメント（花崗岩製）

ここまで、三条大橋の外観を形成する





「擬宝珠」・「木製高欄」・「石柱」を紹介してきた。私の考える三条大橋の最大の魅力は、これら3つの共通点にある。それは「天正時代の形状を継承している」という文化性と、文化継承の産物である「自然景観との調和がとれた外観」だ。

三条大橋は、長い歴史の中で幾度となく洪水の被害を受け、その度に修復されてきた。しかし、天正18年（1590）から現在に至るまでの約400年間、同じ形状が受け継がれてきた。田中緑紅氏の叢書『京の三名橋』に興味深いエピソードがある。西洋式が尊ばれた明治時代、三条大橋は五条大橋と共に洋風への改造が検討されていた。しかし、反対の声が強かった三条大橋は、一

時的に洋風に改められた五条大橋とは異なり、かろうじて擬宝珠を残すことができたそうだ。時流の影響を受け、多くの橋梁が架橋当時の形状を維持できなかったことを鑑みると、三条大橋における「長期に渡る形状の継承」という部分に先人たちの並々ならぬ想いを感じる。三条大橋は「先人たちの想いの結晶」といっても過言ではないだろう。そして、その結果生み出されたのが「景色に馴染む外観」だ。三条大橋の橋脚や木製高欄は遠方の景色を遮らないため、景色にほどよく溶け込む。三条大橋は、その特徴的な外観から一際存在感を放つ反面、景色との調和もとれているのだ。実に京都らしい橋梁である。

また、これだけの歴史を有する橋梁が、人通りの多い街中に存在している点も非常に興味深い。京都へ訪れた際には、是非とも魅力溢れる三条大橋へ足を運んでいただきたい。三条河原に腰掛け、ゆったりと流れる時の中で、三条大橋が醸し出す雰囲気や日常に潜む歴史を感じる。「非日常」を体験する観光地とは一味違う「日常の中にある非日常」を味わう。京都観光の選択肢に「三条大橋」を加えてみるのはいかがだろうか。

【注釈】

（※1）木製高欄に関しては、昭和25年の改装後、昭和49年（1974）に一度更新している。更新の際には、良質な台湾産檜が使用された。

（※2）考察の要約

①殺陣に秀でた役者を起用して検証した結果、池田屋騒動の戦闘が池田屋から約150m離れた三条大橋まで流れ込んだ確率は極めて高いことが判明した

検証方法：殺人に秀でた二人の役者に「池田屋から逃げようとする志士」とそれを拒もうとする「新選組隊士」とに扮してもらい、京都府剣道連盟理事の木村氏立ち合

いのもと、実演してもらった。その結果、池田屋騒動の戦闘が三条大橋まで流れ込んだ確率は極めて高く、それが複数組であつてもおかしくないことが分かった。

②銅製の擬宝珠をナイフやノミなどで深く傷つけることは難しいが、金物の専門家曰く、力いっぱい振り下ろした太刀ならば傷をつけられる可能性が高い

③居合道の段保持者（木村氏）による模擬刀での検証の結果、八相の構えから振り下ろされた刀の切っ先が、位置的にも角度的にも擬宝珠の傷と見事に一致した

④抜刀がご法度の公儀橋（三条大橋）では他の抗争も考えにくいことから、池田屋騒動の際の刀傷である可能性は十分にある

『新選組「池田屋事件」 三条大橋の擬宝珠に隠された刀傷の謎』

<https://smile-log.net/ikedaya-incident/>

（※3）2020年12月末時点の寄付額は約7250万円。

https://mainichi.jp/articles/20210209/k00/00m/040/155000c.amp?_twitter_impression=true

（※4）三条大橋の銘には訓点が記されていない。この書き下し文は白文から推測した。

◆白文

「洛陽三條之橋至後/代化度往還人盤石/之礎入地五尋切石/之柱六十三本蓋於/日域石柱橋濫觴乎/天正十八年庚寅/正月日/豊臣初之/御代奉/増田右門尉/長盛造之」

◆訓読文（※推測）

「洛陽三条の橋は後代に至るまで往還の人を化度す。盤石の礎は地に入ること五尋、切石の柱は六十三本。蓋し日域において石柱橋の濫觴なるか。天正十八年庚寅正月日、豊臣、初の御代に奉る。増田右門尉長盛、これを造る」

◆現代語訳

「京都三条の橋は、後代まで往来する人々の助けとなる。しっかりした基礎は地中に約9m

の深さまで入り、切石の橋柱は63本ある。まさに日本の石柱橋としては最初のものでろう。天正18年の正月の日に豊臣秀吉が世に初めて贈り、増田右衛門尉長盛が造営した」

◆昭和25年当時の京都市長の言葉（南側・東から2つ目）

「三條大橋は明治/四十五年三條通/拡張のとき幅員/を倍加して一四/、五米に、橋長/は一〇一米に、/橋脚はコンクリート造としたが/橋面は従来の風/格をもつ木造橋/であつた /たま [踊り字] 昭和十/年六月の洪水に/あい橋の一部と/擬宝珠一個を流/失この水害に/鑑み鴨川を改修/し、河底を深く/したので、天正/以来の敷石、礎//石は取除かれた/、重ねて今回こ/の橋の修築に際/し、橋を鴨川と/疏水の二部に分/け、橋長は鴨川/部七四、〇三米/疏水部一六、九/七米、幅員はい/づれも一五、五/米とし、橋面構/

造もコンクリート床版としてか/けかえ、この擬/宝珠も新に追補/した/昭和二十五年一月/京都市長/神戸正雄」

◆京都市長の言葉を読みやすいように整理

「三条大橋は、明治45年の三条通り拡張の時に幅員を倍加して14.5mに、橋長は101mに、橋脚はコンクリート造としたが、橋面は従来の風格をもつ木造橋であった。たまたま昭和10年6月の洪水にあい、橋の一部と擬宝珠1個を流失。この水害に鑑み鴨川を改修し、河底を深くしたので、天正以来の敷石、礎石は取除かれた。重ねて今回この橋の修築に際し、橋を鴨川と疏水の二部に分け、橋長は鴨川部74.03m。疏水部16.97m、幅員はいずれも15.5mとし、橋面構造もコンクリート床版としてかけかえ、この擬宝珠も新に追補した。 昭和25年1月 京都市長 神戸正雄」

【参考資料】

・鈴木康久「京の水探訪81・豊臣秀吉が架設した「三条大橋」～世界の名橋を夢見て～」

『日本の老舗』 1999年1月号 (Vol.144、No.10)、pp.600-604

【参考HP】

・京の橋しるべ 創刊号 (平成25年)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/cmsfiles/contents/0000149/149842/hashishirube01.pdf>

・京都市情報館 三条大橋の歴史 (室町時代～安土桃山時代)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/page/0000242825.html>

・洛中洛外図屏風 (歴博甲本)

https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakutyuu/index.html

・京都市情報館 三条大橋マニアになりたい方へ

<https://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/page/0000242831.html>

・京の橋しるべ 第15号 (平成31年)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/cmsfiles/contents/0000149/149842/hashishirube15.pdf>

・社団法人 日本土木工業協会 「しびるレポート 近畿の土木遺産シリーズ」

https://www.nikkenren.com/about/shibiru/c_21/21_13_16.pdf

・新選組「池田屋事件」三条大橋の擬宝珠に隠された刀傷の謎

<https://smile-log.net/ikedaya-incident/>

・京都クルーズ・ブログ 三条大橋の擬宝珠

<https://office34.exblog.jp/13118147/>

・国立国会図書館デジタルコレクション 『京都名勝誌』 (コマ番号191～193)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1907825>

・京都クルーズ・ブログ 明治天皇と榎村正直

<https://office34.exblog.jp/13107666/>

・日本経済新聞 三条に残る秀吉の栄華 鴨川 橋ものがたり(5)

https://www.nikkei.com/article/DGXLASIH21H08_U6A021C1960E00

